

旅の図書館 だより

旅の図書館 の 40年

旅の図書館 副館長・大隅一志

旅の図書館は、2018(平成30)年10月、
開設から40年の節目を迎えました。

1978(昭和53)年の開設からの20年は
「観光文化資料館」として、
その後の20年は「旅の図書館」へと名称を変え、
今日まで歩んでまいりました。

この間、時代は昭和から平成へと移り、
当館を取り巻く社会環境も大きく変わる中で、
3度の移転も経験しました。

ここでは、周年史に代えて、
当館の40年の歩みを時代とともに
振り返り紹介します。

旅の図書館40年の歩み小史

観光文化資料館が誕生するまで(前史)

*世界観光機関(WTO)発足(1月)

「観光文化情報センター」の設置(7月)

当財団資料室内(大手町ビル別館5階に、
「教養型旅行者」の情報ニーズへの対応を目指し
「観光文化情報センター」を設置。

対象者を限定した情報提供サービスからスタートし、
1976年一般公開。

*沖縄国際海洋博覧会開催(1975年7月~1976年1月)

機関誌「観光文化」創刊(12月)

1985年5月(Vol.52)から
2011年3月(Vol.206)まで図書館が編集を実施

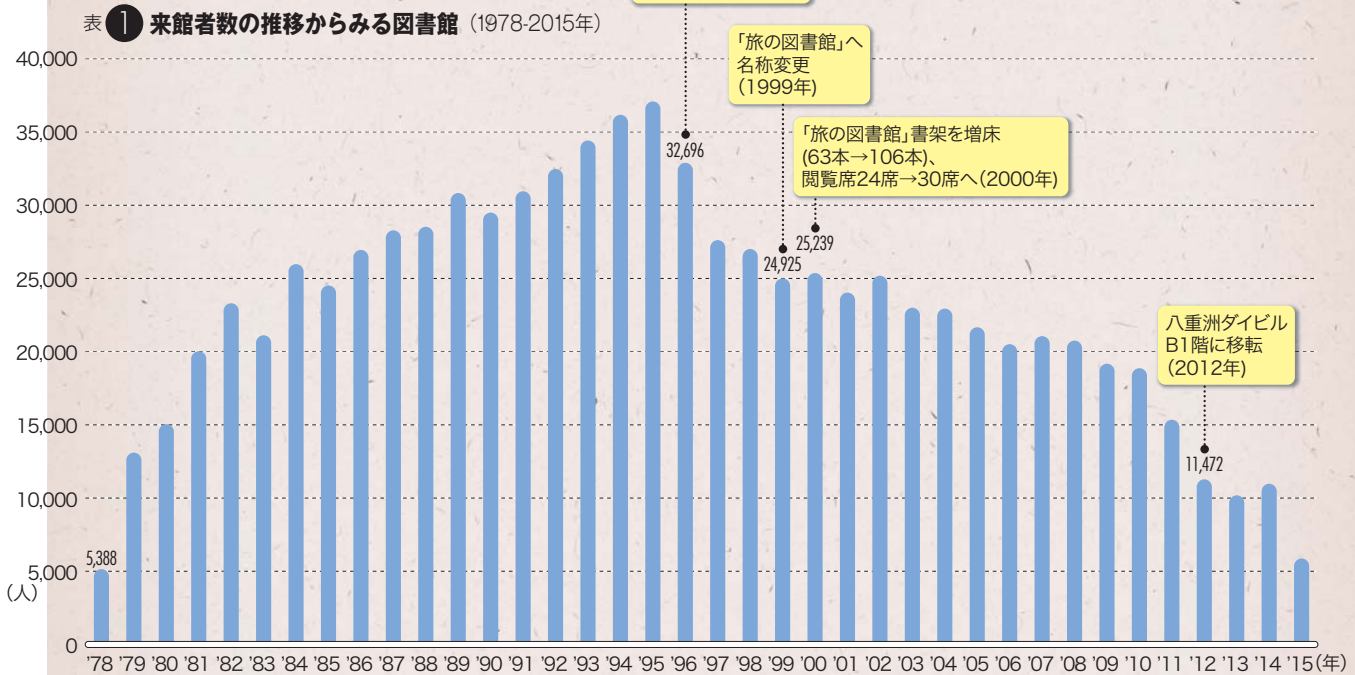
*「第三次全国総合開発計画」閣議決定(11月)

第1鉄鋼ビル1階から
第2鉄鋼ビルB1階に
移転(1996年)

「旅の図書館」へ
名称変更
(1999年)

「旅の図書館」書架を増床
(63本→106本)、
閲覧席24席→30席へ(2000年)

八重洲ダイビル
B1階に移転
(2012年)



観光文化資料館
開設に対する
西尾壽男会長の思い

「観光は
それ自体が
文化であり、
その文化を
向上させたい」



西尾氏は、かねてから観光文化資料館を開設するという夢を持っていた。「旅行は単なる物見遊山で終わってはならない。旅行者が事前に目的地に関して調べ、十分な知識を得てから出なければ、その旅行の内容は濃いものになる。交通の便利な場所に専門の図書館を設けて利用者の勉強の手助けをしたいというのが、西尾氏の思いであった。(社内営業部門からの反対意見があるなかで)「旅行専門の図書館を政府に期待しても実現はなかなか難しいだろうし、世のためにそういう文化的な仕事をするからこそ公益法人に相応しい使命だろう」と西尾氏は考えるのだ。」

※『観光文化資料館二十年史』財団法人日本交通公社理事・社団法人日本交通協会副会長兼理事長 柳井乃武夫氏「観光文化資料館創設者 西尾氏の横顔」原稿より引用

草創期 観光文化資料館の開設と図書館としての基盤の確立

1978～1984

場所の制約や周知不足から一般の利用が限定的であった観光文化情報センターを改編・拡充するが、観光文化資料館を東京駅八重洲口そばに開設。当時、日本経済は第一次オイル

ショック以来の不況から抜け出せず低迷のトンネルの中にありましたが、時代は「モノ」への欲求から「ココロ」の豊かさを求めはじめ、新しいタイプの旅行が増え始めた時代でもありま

した。この時期は、周年事業を展開するなかで、観光文化の向上という開設時の理念を受けた文化講演会の開催や、機内誌、時刻表、ガイドブックなどコレクションの充実を図りました。開館6年目となる1984年には来館者数が10万人を突破し、年間来館者数は2万5千人を超えるようになりました。

*新東京国際空港(現成田国際空港)開港(5月)
*日本、世界観光機関(WTO)に加盟(7月)

「観光文化資料館」開設(10月11日)
東京駅八重洲北口の第一鉄鋼ビル1階に開設。「観光はそれ自体が文化であり、その観光文化を向上させたい」という理念のもと、教養志向型旅行を目指す人への情報提供に資する図書館として誕生。

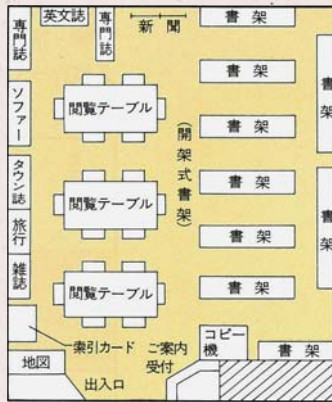
【蔵書数】4062点(地図を含む)。
財団法人日本交通公社 世界観光機関(WTO)に加盟



開設当時の観光文化資料館(外観)



館内



館内図(書架レイアウト)

1979 1980
*第二次オイルショック(2月)
来館者数が1万人を突破(8月)
開設2周年記念「第1回文化講演会」を開催(講師:井上靖氏)(11月28日)
開設3周年記念「第2回文化講演会」を開催(講師:松本清張氏)(2月16日)
*イラン・イラク戦争勃発(9月)



文化講演会

館名の由来
(なぜ「観光文化資料館」だったのか)
開設準備段階での仮名称は「旅行図書館」でした。「単なる物見遊山の旅行のための図書館というイメージではない。『観光文化情報センター』が提供してきた『国内と海外の歴史地理、風俗芸術、芸能、民芸、衣装、祭礼、行事温泉保養、味覚探訪など』『学ぶ観光』『文化教養型旅行』についての情報」を提供するところ」という色合いを強く前面に打ち出した名称にしたい、という思いがその背景にありました。

開設当時の思い出

(立教大学名誉教授・溝尾良隆氏)

私は昭和39年に(株)日本交通公社(現JTB)に入社しました。丸の内1丁目1番地に日本交通公社のビルがあり、その地下に図書室がありました。当時は社員が読むための本が多かったので、外人旅行、国内旅行、海外旅行の各担当者はそこから本を借りて、私も随分本を借りましたよ。

(財)日本交通公社(以下、財団)の資料室ができたのは、別館に移転した時です。当初は国鉄から来た方が図書の整理にあつたのですが、全国の図書館と同じ日本十進分類法(NDC)で分類しようとしたので、かつて、鈴木忠義先生(東京工業大学名誉教授)が考えた観光の図書分類に則り、観光や

1991
1988-90

1987

1985

1984

1983

1982

開設4周年企画

国際線の機内誌(33誌)を収集・公開
国内各地の私鉄やバス時刻表(23種)を展示(10月)

「民族文化の旅ゼミナール」開催(1983-84年計4回)
*東京ディスプレイランドオープン(4月)

来館者数が10万人を突破(5月)
開設5周年(10月)

成長期 来館者の着実な増加

1985~1995

開館5周年を迎えた後も、リ
ゾット法をはじめとした様々な
観光政策の展開や旅行市場の拡
大とともに、来館者数も着実に
増加していきました。

来館者数は1988年
には20万人を超え、バ

ブル崩壊後の低迷する社会経済
の中でもサービスを下下させる
ことなく運営を続け、1991
年には30万人を突破。199
5年には年間来館者数が約3万
7千人とピークを迎えました。

*国際科学技術博覧会(科学万博「つくば85」)開催(3月)

*国鉄民営化(4月)
*「第四次全国総合開発計画」閣議決定/
総合保養地域整備法(リゾート法)成立(6月)
*運輸省海外旅行倍増計画
(「テン・ミリオン計画」)発表(9月)

来館者数が20万人を突破(2月)
開設10周年(10月)

*年間日本人出国者数1000万人達成

*湾岸戦争勃発(1月)

来館者数が30万人を突破(7月)



来館者であふれる館内(1991年)

【文化講演会&ゼミナールの開催】

開設2周年、3周年には、より豊かに収穫あ
る旅をめざし、井上靖氏、松本清張氏とい
う文壇の巨匠を講師に招いた文化講演会を
開催(毎日新聞社共催、NHK後援)。その後、

文化講演会は、(株)日本交通公社創業70周年
記念出版『世界旅行-民族の暮らし』を基
に題材を設定するかたちで継続され、『民族
文化の旅ゼミナール-講演と対話』として、

アカデミズムで活躍されている方々を講師
に1983年から1984年まで4回にわたって
開催。以降は(株)日本交通公社主催の「JTB旅
行文化講演会」として今日に至っている。

文化講演会&ゼミナール記録

回	開催日時	テーマ	講師
第1回	1980年11月28日	観光文化資料館開設2周年記念文化講演会 「シルクロードの旅から」	井上靖氏(作家)
第2回	1982年2月16日	観光文化資料館開設3周年記念文化講演会 「古代史の旅」	松本清張氏(作家)
第1回	1983年3月15日	民族文化の旅・春季ゼミナール 「住む・憩う」 南太平洋民族文化の旅、 現代ヨーロッパの家、日本の家	杉本尚次氏(国立民族学博物館教授) 栗田靖之氏(国立民族博物館助教授)
第2回	1983年3月22日	民族文化の旅・春季ゼミナール 「着る・飾る」 見る眼と着る心、 民族衣装とファッション	大丸弘氏(国立民族学博物館助教授) 飯塚信雄氏(明治大学教授)
第3回	1983年10月29日	民族文化の旅・秋季ゼミナール 「創る・祀る」 アジアの民族音楽をたずねて、 日本音楽の古層をたずねて	藤井知昭氏(国立民族学博物館教授) 小島美子氏(東京芸術大学講師)
第4回	1984年2月18日	民族文化の旅・冬季ゼミナール 「働く・遊ぶ」 仕事の民俗学、民族と遊び	松原正毅氏(国立民族学博物館助教授) 岩田慶治氏(国立民族学博物館教授)

旅行として独自の分類を構築した方が
いいと提案し採用されました。
その後別館から(株)日本交通公社の
本社ビルに戻りましたが、その時に
(株)日本交通公社の図書室と財団の資料
室が一体になったのではないかと
思います。当時は(株)日本交通公社調査部の
情報管理室が資料室を担当していま
したが、1974年に西尾壽男氏が財団
の会長になると、財団の公益性を發揮
すべく、「観光文化振興基金」を創設し、
その最重点事業として「観光文化資料
館」を開設したのです。旅行を豊かに
する文化的情報を社会一般へ提供す
ることが西尾会長の強い願いでした。
「観光文化資料館」の前段階として1
975年に「観光文化情報センター」を
財団資料室内に発足させ、試行的に首
都圏のJTBグループからの問い合わせ
せなどに応えていたようでした。利用
件数も多く、各方面からの要望も強か
ったことを受け、同センターを拡充し
た形で「観光文化資料館」を開設した
と聞いています。しかし、鉄鋼ビルの
1階に開設した段階で、外部の方が旅
行の下調べや勉強をする場所になっ
たこともあり、財団職員にとっては少し
遠い存在になってしまいました。大学
に観光関連の学部学科が増えてきたこ
と、インバウンド旅行者の増大、専門
書と旅行図書との中間の本がたくさん
発行されるようになったこともあり、
2016年に研究本部と図書館が一体
化でき、「旅の図書館」となったことは
タイミングとしてたいへんよかったです。
財団研究員の研究の幅も広がるし、外
部の方々もじっくりと調べる環境が出
来上がったのではないかと思います。

1995 1994 1993

開設15周年・特別記念展示「世界と日本の時刻表フェア」開催(10月)

国内外の鉄道およびバス時刻表(約32か国80点を公開)

*屋久島、白神山地在世界自然遺産、姫路城、法隆寺地域の仏教建造物が世界文化遺産に登録(12月)

月間来客者数過去最高を記録(4月)

来館者数が40万人を突破(7月)

*阪神・淡路大震災(1月)

*Windows95、日本で発売(11月)

年間来館者数36,876人を記録(1995年度)

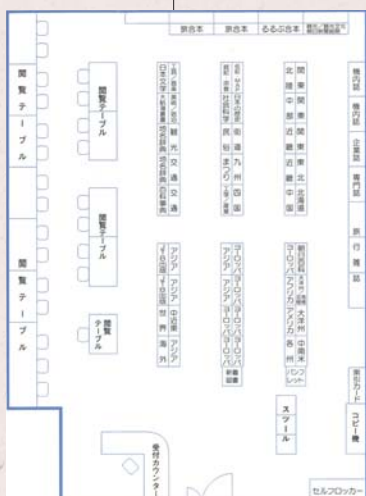
転換期

2度の移転、環境変化の中で専門図書館としての力を蓄積
1996～2015

1996年に最初の移転、1999年には「旅の図書館」と名称を変更、さらに2012年には2度目の移転を行いました。さらに1990年代後半からのインターネットの急速な普及による旅行情報の収集方法の変化など、図書館を取り巻く環境は大きく変わっていきました。一方でこの時期は、貴重資料のデジタルアーカイブ化や図書館システムの導入をはじめ、時代変化に対応した専門図書館としての機能の充実が図られることも

に、次第に、研究機関が運営する専門図書館としてのあり方を見つめ直すべき時期を迎えてもいました。調査研究部門のある当財団本部との一体的な移転計画が具体化してきたことにより大きな転換期を迎え、本格的なリニューアル準備のため2015年9月末、一時閉館しました。

*運輸省「ウエルカムプラン21」発表(4月)
第二鉄鋼ビル1階から第二鉄鋼ビル地下1Fへ移転(10月)
書架・施設の拡充を目的に10月1日再開館。



館内図 (1996年)



第二鉄鋼ビル移転後の図書館 (館内)

観光文化セミナー開催記録

回	開催日時	テーマ	講師
第1回	2003年 10月10日	「世界の風水都市」	目崎茂和氏(南山大学総合政策学部(環境学・地理学)教授)
第2回	2004年 10月13日	「景観論と食文化」	小林亨氏(前橋工科大学教授)
第3回	2005年 10月26日	「日本ポップカルチャーとアキハバラ」	小野打恵氏((株)ヒューマンメディア代表取締役社長)
第4回	2006年 10月26日	「歩きたくなる観光地作り-その五原則と提言八策」	村山友宏氏((社)日本ウォーキング協会副会長)
第5回	2007年 4月26日	「長崎さるく博が切り開いた都市観光の可能性」	茶谷幸治氏(イベント・プロデューサー)
第6回	2007年 10月24日	「歴史的景観の意義と保全活用に向けての諸問題」	岡崎篤行氏(新潟大学工学部建築学科准教授)
第7回	2008年 4月24日	「ラグジュアリートラベルとは何か」	福永浩貴氏((株)アール・プロジェクト・インコーポレイテッド代表取締役、ザ・リヨカン・コレクション代表)
第8回	2008年 10月23日	「観光」の系譜	沢木泰昭氏
第9回	2009年 4月21日	「国土観光のすすめ」	家田仁氏(東京大学大学院教授・当財団専門委員)
第10回	2009年 10月27日	「ジオパークとジオツーリズム-地球に親しむ観光とは-」	矢島道子氏(NPO法人地質情報整備・活用機構)
第11回	2010年 4月27日	「はじまりの奈良、めぐる感動-平城遷都1300年祭の事業戦略と戦術」	福井昇平氏(平城遷都1300年記念事業協会チーフプロデューサー)
第12回	2010年 10月28日	「港の景観形成と美しいみなとまちづくり~清水港を代表例として」	東恵子氏(東海大学開発工学部感性デザイン学科教授)
第13回	2011年 4月26日	「『桜田門外ノ変』映画化と観光振興-茨城の魅力を全国に発信」	橋川栄作氏(茨城県候補戦路室室長補佐・総括)

2007 2006 2005 2004 2003 2002 2001 2000 1999 1998 1997

【蔵書数】19,389冊(図書のみ)。
来館者数が50万人を突破(5月)

*長野冬季オリンピック・パラリンピック開催(2-3月)
*21世紀の国土のランドデザイン」閣議決定(3月)

開設20周年記念式典

「観光文化資料館開設20年を祝う会」を開催、
「観光文化資料館二十年史」発行(10月13日)
海外ガイドブックフェア開催(10月)
1200冊を収集・展示

「旅の図書館」へ名称を変更(4月)

「旅の図書館」は、観光文化資料館開設時から
当館の特徴を伝える表現(愛称)として用いてきたもので、
開設20年を機に館名もわかりやすい名称に。

*蔵書を広く公開することを目的に増床(6月)

インターネット蔵書検索システムを導入(4月)

*米国同時多発テロ(9月)

*FIFAワールドカップ・日韓大会開催(5月)

雑誌『ツーリスト』『旅』のデジタル化に着手(7月)

「観光文化セミナー」の開催スタート(10月)

開設25周年を記念してはじまった旅・観光に関する
様々な分野の専門家によるセミナー。
2011年4月までに全13回開催

デジタルコレクション(「ツーリスト」「旅」館内で一部閲覧開始(9月))

*愛知万博「愛・地球博」開催(3-9月)2005

韓国文化観光政策研究院と研究交流協定を締結

「旅の図書館講座」の開講スタート

「教養指向型(テーマのある旅)の普及を図ることを目的に、
毎週土曜日の午後開催。2011年1月までに全10回開催

*「観光立国推進基本法」施行(1月)



「ツーリスト」・「旅」



「観光文化資料館二十年史」



「旅の図書館講座」風景(第5回)

旅の図書館講座開催記録

回	開催日時	テーマ	講師
第1回	2006年 7月8日	「旅して食べて…」	向笠千恵子氏(フードジャーナリスト、エッセイスト、 農林水産省食アメニティ・コンテスト審査員)
第2回	2007年 2月3日	「富士の四季を撮る」	樋口健二氏(フォトジャーナリスト)
第3回	2007年 7月7日	「植物を通しての日欧文化交流」	加藤僊重氏(獨協大学国際教養学部教授)
第4回	2008年 1月26日	「まち歩きを楽しむ」	高橋美江氏(絵地図師)
第5回	2008年 7月5日	「落語で楽しむ旅の味わい」	柳家小蝠氏(落語家)
第6回	2009年 1月24日	「鉄道の旅…その魅力とわざ」	野村正樹氏(作家)
第7回	2009年 7月11日	「暮らしに息づく京都1200年の文化資産」	土居好江氏(NPO法人遊悠舎京すずめ理事長、 京都文化観光研究所所長)
第8回	2010年 1月23日	「昭和レトロを楽しむ旅」	串間努氏(昭和レトロ文化研究者)
第9回	2010年 7月10日	「日本のスピリチュアルな世界-里山・神話の里」	ケビン・ショート氏(ナチュラリスト、フォークロア 研究者)
第10回	2011年 1月29日	「マカオと日本 今昔(いまむかし) 世界文化遺産の基盤を 築いたのは信長、秀吉!-「鉄」と「銀」を交換した戦国意外史-」	沢木泰昭氏(旅行ジャーナリスト)

2008

* iPhone日本での発売開始(9月)
 * 観光庁発足(10月)
開設30周年、記念講演会開催(10月4日)
 講師：旅行作家・山口由美氏
 「だから世界の旅は面白い」、
 ドイツ文学者・エッセイスト
 池内紀氏「旅する心」



開設30周年記念講演会チラシ
 特別展示開催風景

2011 2010

特別展示の企画開催スタート(2月)
 図書館の蔵書を中心としたテーマによる企画展示を実施。
 2015年2月までに全21回開催
来館者数が80万人を突破(4月)



* 東日本大震災、福島第一原子力発電所事故(3月)
海外電子ジャーナル専用PCにて供用開始(7月)

公益財団法人に移行(4月)

長期経営計画「22ビジョン」を策定。

「旅の図書館が実践的学術研究機関の一組織として機能する方向性が打ち出される。」

八重洲ダイビル地下1階に2度目の移転(4月)

【蔵書数】約3万2000冊

図書館システム(LI-MEDIO)運用開始(4月)

クラウド型の図書館システムの導入。
 蔵書の管理及び検索機能が格段に向上。

デジタルコレクションのビューワーを更新(2014年4月)

移転を見据えた新たな図書館構想に着手

【蔵書の独自分類の構築・導入

(2014年7月~2015年6月)

海外電子ジャーナル追加2誌の利用開始

(2014年8月)

特別展示開催記録

回	開催日時	テーマ	概要
第1回	2010年2月15日~2010年2月26日	「フットパスを歩く旅」	国内外の歩くことを楽しめる観光地についての資料を展示。
第2回	2010年3月1日~2010年3月31日	「奈良・平城京」	平城遷都1300年に際し、奈良や平城京に関する資料を展示。
第3回	2010年4月19日~2010年5月28日	「上海」	上海万博(2010年5月1日~10月31日)の開催に際し、上海や中国に関する資料を展示。
第4回	2010年6月7日~2010年6月30日	「W杯開催地 南アフリカ」	サッカー・ワールドカップ南アフリカ大会(2010年6月11日~7月11日)の開催に際し、南アフリカに関する資料を展示。
第5回	2010年7月12日~2010年8月27日	「家族旅行と道の駅」	高速道路無料化に伴う、夏休みのマイカー旅行向けの資料や道の駅のパンフレットを展示。
第6回	2010年9月6日~2010年10月1日	「ソウル+αで楽しむ韓国 -忠清南道、順天-」	2010年世界大百済典(2010年9月18日~10月17日)の開催に際し、韓国に関する資料を展示。
第7回	2010年11月8日~2010年12月3日	「冬こそ北欧でオーロラ」	ノルウェー、スウェーデン、デンマーク、フィンランド、アイスランド、グリーンランド、フェロー諸島に関する資料を展示。
第8回	2010年12月6日~2011年1月28日	「さらに遠くの青森へ」	東北新幹線全通(2010年12月4日)を記念し、青森県の観光に関する資料を展示。
第9回	2011年2月7日~2011年4月1日	「九州おひなまつりめぐり」	2月~3月にかけて九州各地で開催される「おひなまつり」イベントに際して、九州のおひなまつりに関する資料を展示。
第10回	2011年7月4日~2011年8月31日	「今年の夏は避暑地でロングバケーション」	夏季の節電対策の一環として、避暑地(観光地)でも滞在に関する資料を展示。
第11回	2012年7月2日~2012年8月31日	「ロンドンオリンピック」	ロンドンで開催される第30回夏季オリンピック(2012年7月27日~8月12日)に際して、イギリス、ロンドン、オリンピックに関する資料を展示。
第12回	2012年10月1日~2012年11月30日	「東京駅からまち歩き」	東京駅のリニューアル(2012年10月完成)を記念し、東京駅と其の周辺地域の歴史、建築、街並み、宿泊施設等の資料を展示。
第13回	2013年1月7日~2013年2月28日	「LCCで楽しむ新しい空の旅」	LCC元年(2012年)に際して、LCCを利用した旅の楽しみ方、LCCのビジネスモデルを支える仕組み等に関する資料を展示。
第14回	2013年4月1日~2013年5月31日	「観光学を考える」	国内外の観光学の言論および理論を扱う図書および研究論文等、観光学を考える上での様々な資料を展示。
第15回	2013年7月1日~2013年8月30日	「聖地を巡る旅」	60年に一度の出雲大社の大遷宮、20年に一度の伊勢神宮の式年離宮、そして富士山の世界文化遺産登録を記念し、国内外の聖地を訪れる旅行ガイドブックや聖地に関する研究図書等の資料を展示。
第16回	2013年10月1日~2013年11月29日	「観光における"食"の役割」	"旅と食"に関する国内外の研究図書等の資料を展示。
第17回	2014年1月6日~2014年2月28日	「なぜ人は旅するのか」	観光心理学の専門書や旅の歴史に関する国内外の図書等を展示。
第18回	2014年4月1日~2014年5月30日	「おもてなしとホスピタリティ」	2020年東京オリンピック(2020年7月24日~2020年8月9日)の開催決定に際して、おもてなし、ホスピタリティに関する資料を展示。
第19回	2014年7月1日~2014年8月29日	「観光資源と地域の魅力」	日本交通公社の研究成果を基に監修した写真集『美しき日本 旅の風光』の出版に際し、写真集とともに観光資源と地域の魅力に関する資料を展示。
第20回	2014年10月1日~2014年11月28日	「日本の温泉地と観光」	日本交通公社と国内の代表的温泉地が連携して取り組んだ「温泉まちづくり研究会」の成果、及び温泉地と観光に関する資料を展示。
第21回	2015年1月5日~2015年2月27日	「日本を旅した外国人」	2013年に訪日観光客数が年間1000万人を突破したことに際して、日本を旅した外国人に関する資料を展示。

2014

「たびとじよCafe」の開催スタート(11月)
研究者や実務者との気軽な交流の場の創出をめざし、八重洲ダイビルでの旧館時代に5回開催。南青山に移転後も継続開催。

2015

移転リニューアル準備のため一時閉館(2015年10月〜2016年9月)
南青山への移転準備のため1年間休館。
図書・什器等を倉庫に一時保管し、資料室資料の統合作業、引越作業に入る。

再生期

新たなコンセプトの専門図書館として再出発
2016

1年間の一時閉館を経て、当財団本部とともに港区南青山に移転。2016年10月、観光

の研究や実務に役立つ図書館、という新たなコンセプトの専門図書館としてリニューアル開催

しました。
「観光の研究・情報のプラットフォーム」を目指す
す日本交通公社ビルの中核的な役割を担うべく、運営を行っています。

2016

文部科学省から科学研究費補助金取扱規程に規定する
学術研究機関の指定を受ける(4月)
日本交通公社ビル竣工(8月9日)
*港区南青山に当財団本部とともに移転(引越)(8月10日〜21日)
*閉館準備(8〜9月)
関係者を招いた内覧会&たびとじよCafe(特別版)を3回開催(9月)
旅の図書館リニューアル開催(10月3日)
開設当初の理念を受け継ぎつつ、観光の研究者・実務者向けの図書館としてリニューアルし再開館。
【蔵書数】約6万冊。
観光文化231号「観光の研究と実務に役立つ図書館」を目指して「刊行

2017

国連世界観光機関(UNWTO)の寄託図書館に認定(3月)
リニューアル開催1周年事業を実施(10〜12月)
1周年を記念してニュースレター「たびとじよ」刊行、第11回たびとじよCafe開催、パネル展示
旅の図書館総監修「ツーリスト(大正期)」復刻版 ゆまに書房より刊行(9月)

2018

古書・稀親書のデジタルアーカイブ化(及び保存箱作成)に着手(1月)
専門図書館協議会より平成30年度団体功績表彰を受賞(6月)
開設40周年記念事業を実施
第15回たびとじよCafe開催
観光文化239号「古書から学ぶ」刊行
古書展示ギャラリー特別展示(第1弾〜第3弾)



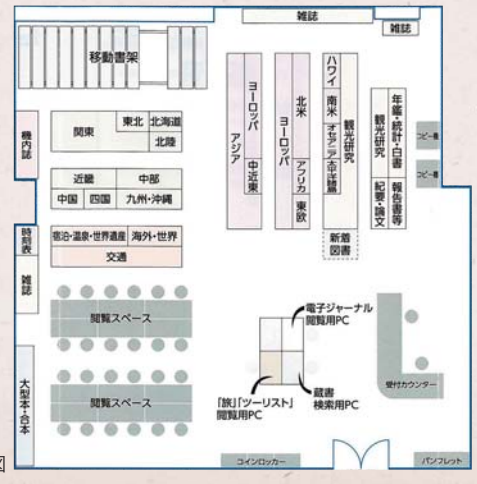
八重洲ダイビル地下1階移転後の図書館(館内)



たびとじよCafe(第2回)



関係者を招いた内覧会&たびとじよCafe(特別版)を3回開催(9月)



館内図

たびどしよ コレクション ができるまで



開設当時のリーフレットに紹介されている古書・稀観書

旅の図書館の蔵書（コレクション）は、旅・観光をテーマとしたものであることが特徴です。これらは40年にわたる運営の中で収集を重ね、少しずつ構築されてきました。当館の場合、これらのコレクションには、開設以降の周年事業における企画展示などを契機として重点的に収集されはじめたものも少なくありません。また、地域的な関心

や建築、民俗（族）学、産業遺跡、イスラム文化など、歴代館長の経験や興味、嗜好などが反映されていることも専門図書館の特徴といえます。

当館の独自分類のひとつである「F (Foundation) 分類」の資料は、当館の蔵書のなかでも、とりわけ「旅の図書館（たびどしよ）」ならではのコレクションです。ここでは、当館自慢の蔵書が構築されてきた経緯をご紹介します。

古書・稀観書

戦前を中心とした旅行・観光関連の貴重資料は現在約2300冊。「観光文化資料館」の開設（1978年）当時、すでに約500冊の稀観書がありました。これらの中には、当財団の前身であるジャパン・ツーリスト・ビューロー（1912年創立）の生みの親である木下淑夫氏が収集してきた蔵書や同氏の意を受け継いで収集された「木下文庫」も含まれています。当時のリーフレットには、『特命全権大使米欧回覧実記』『日本案内記』『鉄道旅行案内』『Baedeker's Handbook』などが紹介されています。その後、少しずつ古書・稀

観書の収集を続け、寄贈などもいただき、次第に充実してまいりました。しかし、これらは、一般書架とは別のところに保存されていたり、書架が手狭なことから倉庫に預けていた時期もあり、その存在は一般の利用者に充分認知されてはいませんでした。

南青山への移転にあたっては、分類を見直し、古書・稀観書専用の書架を設置するとともに、ギャラリー展示を行うようにしたこと、多くの来館者にその存在を知っていただけるようになり、外部の博物館での企画展示に協力する機会も増え、あらためて所蔵する古書の貴重さを認識しています。

一方で、こうした古書・稀観書は、破損や劣化も目立つようになり、長期的な保存と利便性の向上が課題となってきました。ジャパン・ツーリスト・ビューロー（当財団の前身）の雑誌「ツーリスト」（1913年創刊、日本で最も長く続いた旅行雑誌「旅」（1924年創刊）は、開設30周年を記念してデジタルアーカイブ化に着手し、現在、両誌とも創刊号から前者は終刊まで、後者は2004年1月号まで、



館内の専用PCで閲覧できる「デジタルコレクション」

当館内で「デジタルコレクション」として閲覧いただけます。さらに開設40周年を迎え、2017年度からは残る古書稀観書の本格的なデジタルアーカイブ化に着手しています。

ガイドブック

旅の情報提供を目的として開設した当館では、当初からガイドブックを収集してきました。特に海外のガイドブックの収集には力を入れ、『ミシュラン』、『フォーダーズ』の2シリーズは開設以来長らく収集を続けてきました。1990年代は、来館者の9割が海外の情報を探っていた時代で、1996年には『ロンリープラネット』『フォーダーズ』のシリーズ全点を購入しています。記録によると、『ロンリープラネット』は、当

時当館で最も利用率の高いシリーズであったようです。開設20周年にあたる1998年には、海外ガイドブック1200冊を収集し展示しました。南青山への移転・リニューアルにあたっては、収蔵方針の見直しに伴い、ガイドブックは網羅的収集から厳選収集へと変更しました。



長年収集してきた古いガイドブック

機内誌・時刻表

ガイドブックとならぶ当館の特徴的なコレクションに機内誌と時刻表があります。

①機内誌

機内誌は、1982年の開設4周年企画として、日本に乗り入れている各航空会社の協力を得て、国際線の機内誌（搭乗しなれば読めないイン・フライ

旅の図書館
ニューアル
回想録
 2014-2016
 背景と経緯

開設4周年を記念して開催した
 機内誌展示



ト・マガジン) 33誌を集め公開したことで、メディアにも取り上げられ話題となりました。以来収集を続けてきており、現在も収集している機内誌は、国内・海外合わせて約40誌(すでに就航していない航空会社の古い機内誌等を含めると約70誌)に及びます。海外の航空会社の機内誌は、国立国会図書館にも納本されていないため、当館は様々な航空会社の機内誌が古い時代のものも含めて閲覧できる数少ないの図書館といえます。

②時刻表
 機内誌と同様に、開設4周年

企画(1982年)として、国内各地の私鉄やバス時刻表(23種)を展示し、大型時刻表では省略されている部分も調べられるとあって好評を得ました。また開設15周年(1993年)には、記念イベントとして、特別記念展示「世界と日本の時刻表フェア」を開催し、国内外の鉄道およびバス時刻表(約32か国80点)を公開し、旅行ファンに加え、時刻表マニアが多数来館



開設4周年を記念して開催した時刻表展示

したといえます。そのほか、多くの寄贈もいただき現在にいたっています(ただし1985年以前の時刻表については、複製版を除き閉架資料として扱っており、研究目的での閲覧に限定しています)。

調査研究資料

現在、当館の書架には、観光に関する各種研究レポートや統計資料が一般の研究書・実務書と一緒に配架されています。「灰色文献(一般の出版流通にのらない資料)」といわれるこれらの資料の多くは、当財団の50年余りの研究活動の中で収集してきた調査研究資料で、研究部門があった本部資料室にあり、非公開資料として扱ってきました。南青山への移転・リニューアルを機に、可能な限り公開していきます。

観光関連社史

当館が所蔵している社史は、旅行や運輸・交通、宿泊等の観光関連産業を中心に約320冊。社史の刊行時に寄贈いただくなどして少しずつ充実させてきましたが、南青山への移転・リニューアルを機に、利用者により分かりやすく利用いただけるよう「社史コーナー」を設置し配架しています。

本年、開設40周年記念事業として、観光関連社史の収集強化に取り組んでいます。

UNWTO関係資料

当館は2017年3月、国連世界観光機関(UNWTO)の寄託図書館に認定されました。これを機に、『Yearbook of Tourism Statistics』『Compendium of Tourism Statistics』など従来か

ら収集してきた資料に加え、様々なUNWTOの刊行物を収集・公開していくことになりました。

※寄託図書館・高度な教育機関または科学の分野で認知された機関に属していること、UNWTOの刊行物を収集し、広く公開する図書館であることといった一定の基準のもとに認定される。

地域情報誌

当館でこれまでに収集している選りすぐりの地域情報誌は現在約110誌。2017年より収集をはじめた最も新しいコレクションの一つです。主要な都市や観光地で発行されている地域情報誌は、その地に足を運ばなければ見ることができず、市販のガイドブックにはない地域ならではの魅力にあふれた情報の宝庫でもあり、今後も積極的に収集していく予定です。

1 リニューアルの背景

2016年の南青山への移転は、長らく別々の場所で運営してきた当財団本部との一体化、およびコンセプトの変更による新たな図書館への転換という点で、過去2度の移転とは異なる大きな意味を持っていました。特に移転計画が本格的に動き出

した2014年から、1年間の一時休館を含めリニューアル開館までの約2年半は、新たな図書館づくりへの様々なチャレンジの連続でした。ここでは、リニューアルの背景とその経緯を紹介いたします。

3度目となるこの移転では、取ってコンセプトを変えてリニューアルをすることになりました。その大きな理由は、1990年代後半からのインタ

ーネットの急速な普及による旅行情報収集手段の変化により、旅の下調べを目的とした図書館としての利用価値が低下してきたことが挙げられます。こうした状況を背景に、今後の図書館が、旅行情報について紙媒体を中心に提供する図書館

のままで将来的な利用者ニーズへの対応が難しいことは、次第に認識されるようになっていきました。2010年7月には、

本部資料室の存在や観光・旅行関係のシンクタンクとしての当財団の強みを活用できる「観光分野の調査・研究のための専門図書館」という方向性も提案されています。しかしながら、その実現の前提となる本部との一体化は容易ではなく、2012年には八重洲ダイビルに2度目の移転。図書館を取り巻く厳しい環境下での運営が続き、厳しい環境下での運営が続き、リニューアルへの大きな転機となったのは、当財団が公益法人認定を機に2012年に策定した長期経営計画「22ビジョン」において、「実践的な学術研究機関」としての組織像が打ち出され、基本方針の一つに「旅の図書館が機関の一組織として機能する」ことが位置づけられたこととです。これによって、観光研究機能に対応した図書館の方向が明確になりました。そして、学術研究機関としての機能および経営基盤の強化のため、当財団本部と図書館が一体となった自社ビル建設がいよいよ具体化したことで、本格的なりニューアルへの取り組みが始まりました。

2 構想策定、新たな図書館像を描く

2014年4月～7月

リニューアルは必然的な流れでしたが、それだけで現在の図書館の姿が導き出されたわけではありません。「22ビジョン」策定時に描かれた図書館の方向は、①専門性の強化、②研究ライブラリー機能の強化、③広報機能の強化、④研究員の利用性の向上、⑤観光文化の振興に寄与する蔵書の充実といったものでした。リニューアル後の現図書館も、基本的にはこれらの機能の充実を図る方向にあります。ただしこれらの機能は、必ずしも公開性の高い図書館でなくとも、研究部門のあった当財団本部資料室の機能を充実させていくことで、ある程度対応は可能です。事実、「22ビジョン」を受けた検討段階では、いわば企業内ライブラリー的な閉架型の図書館という選択肢も残されていきました。今回のリニューアルにあたっては、単なる本部との物理的な一体化にとどまらず、学術研究機関としての組織活動の一翼を担う図書館とは？ という本質的な課題に正面から

向き合い、「組織の価値を高めることにも寄与できる図書館のあり方」をあらためて見つめ直す必要がありました。

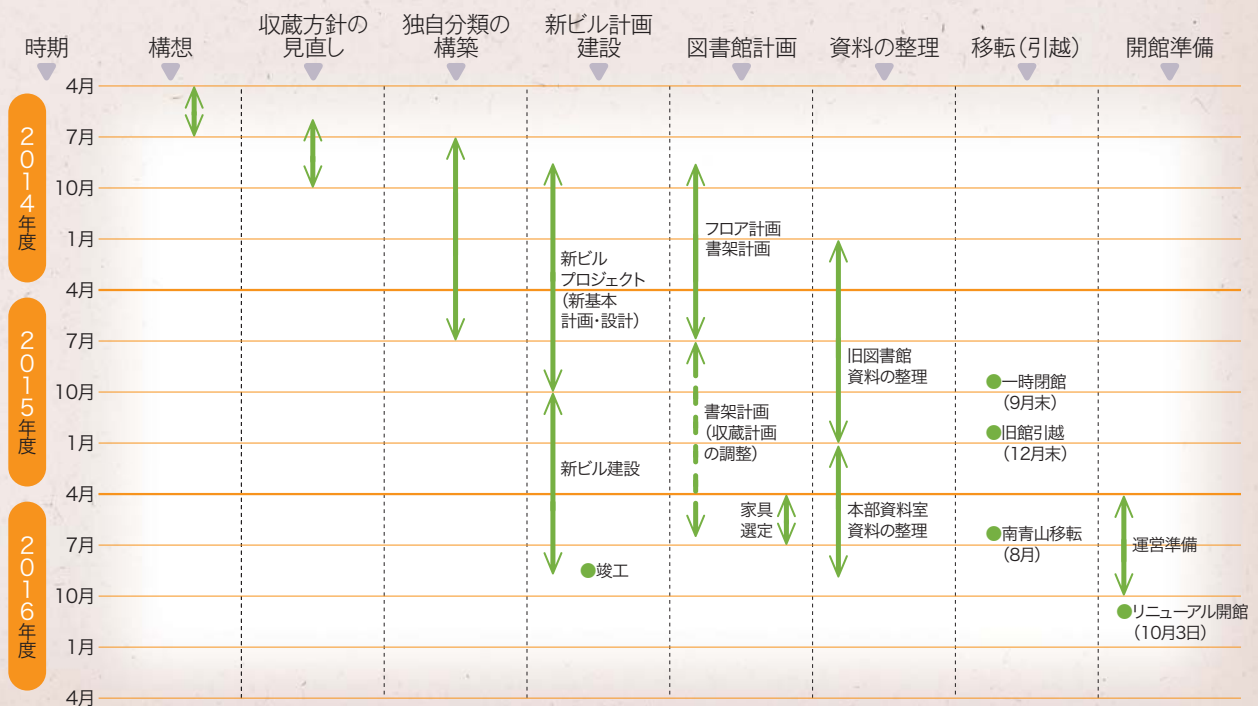
移転がいよいよ具体化してきた2014年4月。最初に取り組んだのは、現状にとらわれず、学術研究機関の図書館としてのあり方を徹底的に探り、その具体イメージを青写真として描くことでした。そのため、図書館を取り巻く動きを知り、図書館の持つ新たな可能性を引き出すべく、様々な公共図書館や専門図書館に足を運び、そのヒントを探しました。そして図書館職員全員で議論を重ね、目指す新たな図書館像を構想にしました。幸いこの構想は組織に概ね受け入れられ、リニューアルの方向性が定まりました。構想策定時に描いた図書館像は、「観光の研究と実務に役立つ図書館」というコンセプトによってリニューアル後の図書館の姿としてかたちとなり、現在の運営のなかに息づいています。

3 蔵書を再構築する

2014年4月～7月

コンセプトの変更による新たな図書館づくりへの第一歩は、

図 ① 移転・リニューアルの経緯(2014-2016年)



主たる利用対象として想定した観光の研究者や実務者に重点を置いた蔵書の再構築であり、そのための収蔵方針の見直しでした。それは、移転後の所蔵スペースに制約があることを前提に、旅の図書館にある蔵書と今後統合する本部資料室資料の中から、「何を残し」、「何を除籍（廃棄）するか」の選択基準をつくることでもありました。

収蔵方針の見直しにより、旅の下調べ向けのガイドブックや旅行記（エッセイ）などの旅行情報提供のための資料は大幅に削減することにしました。一方、これまで当館が収蔵してきた様々な国内外のガイドブックや機関誌、時刻表などの古いものは、当財団と同じく学術研究機関である大学の付属図書館にもない特徴的な資料であり、観光研究の上ではアーカイブ資料としての価値をもちうるため、厳選し継続して保存することにしました。このように、蔵書の再構築にあたっては、全ての蔵書を対象に、観光の研究および実務の参考に資するかどうかの観点から見直しを行いました。

4 独自分類にチャレンジする

2014年7月
2015年6月

収蔵方針の見直しとともに、より専門性の高い図書館を実現する上で不可欠な取り組みが、観光研究分野の専門資料に対する独自分類の導入です。これまで旅・観光に関する一般の図書・雑誌を中心に収集してきた当館では、開設以来、公共図書館と同様に日本十進分類法（NDC）を用いて分類してきました。しかし、今後重点とする観光研究分野の専門資料は様々な領域に関わるため、NDCの第三次区分の一つに過ぎない「689（観光事業）」の中にすべて収めることにはもともと無理がありました。加えて、わが国では歴史の浅い観光学の体系が十分確立されておらず、そのまま適用できる分類方法もありませんでした。

このように、独自分類の必要性は十分認識しつつも、取り組むとすれば、独自分類を再構築したうえですべての蔵書の分類を見直し、図書ラベルの貼り換えや図書館システムの目録データの修正を行うという大がかり

な作業になるため、それなりの覚悟が必要になります。当館と同様に特定テーマをもち、独自分類を行っている専門図書館として取材した「食の文化ライブラリー」・「松竹大谷図書館」・「広告図書館（現アド・ミュージアム東京）」は、いずれも各館の所蔵資料の特性に合わせた丁寧な独自分類を行っており、専門図書館における独自分類の必要性を痛感させてくれるとともに、独自分類を導入する上で多くの示唆を与えてくれました。

こうした経緯を経て、現在当館が観光研究資料に用いている「T（Tourism）分類」という独自分類は、国内の観光学の第一人者であり当財団の専門委員・評議員でもおられた鈴木忠義氏（東京工業大学名誉教授）の観光学の体系、国内外の「観光」「Tourism」の概論が書かれた主要図書の目次などを参考にしつつ、当館の所蔵資料に合致するように考慮し、本部研究員とともに2014年7月から約1年をかけて検討を重ね構築したものです。当館の独自分類は、観光研究分野では国内で初めての分類方法ということで、国立国会図書館にも注目いただきました。

図2 構想策定時に描いた図書館像（2014年5月時点）



なお、当館では、当財団刊行物や調査研究報告書、ガイドブック・機内誌・時刻表、古書・貴重資料などの特徴的な蔵書をアピールするため、「F(Foundation)分類」というもう一つの分類方法も併せて構築しました。現在、これら2つの独自分類と、基礎的な文献の分類に用いる従来の「NDC分類」を組み合わせた3つの分類方法によって蔵書の管理を行っています。

5 図書館を計画する

2014年8月
2015年6月

2014年8月からは、社内に自社ビル構想プロジェクト会議が設置され、いよいよ新社屋の建築に向けた構想、計画・設計が動き出しました。当然のことながら、本部との一体化を伴う図書館の計画も、図書館単独では進めることはできず、社屋全体の機能や空間のあり方を検討していくなかで、新たな役割を発揮できる図書館計画を具体化していく必要がありました。そのため、図書館計画は、当財団全体のプロジェクト会議の分科会の一つとして、本部研究員

もメンバーとして参画しながら検討を重ね、少しずつ組織全体での共有化を図っていきました。

「観光の研究・情報のプラットフォーム」をめざす新社屋（日本交通公社ビル）において図書館は、当財団と外部の人や組織をつなぐための中核的な存在としての役割が期待されました。当財団の総合受付を兼ねたカウンター、研究活動を「見える化」するために設けたギャラリ

ーや研究員のミーティングにも使える閲覧席、ミニ研究会から100人規模のシンポジウムまでフレキシブルな活用が可能なメインライブラリーなどは、既存の図書館の発想から抜け出して、図書空間を最大限に活かした「観光の研究・情報のプラットフォーム」づくりを徹底的に追求するところから生まれていきました。

計画は他の部門との調整を繰り返しながら、概ね2015年6月までに骨格ができあがり、2015年10月からは建築工事へと移りました。ただし、書架の計画（蔵書の種別配置計画）もこの時点でほぼ固まりましたが、本部資料室も含めた図書・資料の選別・再分類が完了する移転間際（2016年7月）ま

で、収蔵計画の見直しは幾度となく続きました。

6 図書・資料を選別・再分類する

2015年1月
2016年7月

収蔵方針の見直し、独自分類の構築が完了した次のステップは、書架計画と並行しての図書・資料の選別・再分類、装備（図書ラベルの貼り換えなど）、図書館システムの目録データ修正、そして除籍作業です。

移転前の蔵書数は、図書館約5万冊（図書3・7万冊、雑誌1・3万冊）、資料室約1・5万冊（図書1・3万冊、雑誌0・2万冊）で、合わせて約6・5万冊。その他倉庫にある未整理資料を含めると7万冊近くに及びます。一方で移転後の書架の収蔵規模は、資料室との重複図書や収蔵方針の見直しによる削減を前提に、収蔵能力の高い書架（移動書架）の導入により確保可能な6〜7万冊を目標としました。そのため、移転後の蔵書の増加にも対応していくには、1万冊を超える図書の削減が必要となりました。こうした図書・資料の選別作業で最も苦労したのは、除籍対

象となった図書も運営している間は廃棄できないため、図書館としての通常運営に支障がないように効率よく作業を進めることでした。この選別作業や再分類作業は日々、開館時間だけでなく、開館前と閉館後の時間も活用してスタッフで少しずつ進めていきました。

図書館の図書・資料の選別から除籍作業までの一連の作業はダイビルを退去する2015年12月までに終了し、その後は資料室資料の作業に移りました。

なお、約6万冊に及ぶ蔵書の再分類と図書ラベル等の再装備にかかる作業は、専門資料を対象

とするため外部委託せず、すべて当館のスタッフ自身の手で行いました。期間的な制約がある中で膨大な作業でしたが、結果的に図書館を運営する職員が自館の蔵書を熟知するうえで貴重な機会となりました。

7 一時閉館しダイビルを退去する

2015年10月
2015年12月

移転（引越）準備のため、図書館は2015年9月末に一時閉館。八重洲ダイビルを退去する12月末までの3ヶ月は、図書・資料の除籍・廃棄作業や図書ラベルの貼り換え、引越作業などに追われました。除籍図書のうち、まだ利用価値が高いガイドブックや紀行書など約3000冊については、幸い、当財団を事務局とする「温泉まちづくり研究会」メンバーでもある阿寒湖温泉（北海道釧路市）と由布院温泉（大分県由布市）が快く引き受けてくれることになりました。



リニューアル開館前の図書館（開館準備中）

8 資料室資料の整理・統合に 取り組み

2016年1月～7月

2016年1月からは当財団本部資料室が有する資料約1・



左：本を寄贈した阿寒湖温泉（まりむ館）、右：由布院温泉（由布市ツーリストインフォメーションセンター）



移転後に引き継ぐ図書・資料および什器備品は1年間埼玉県久喜市の倉庫に預け、12月末、八重洲ダイビルを退去しました。

5万冊の整理・統合作業に移りました。これらは長年調査研究活動のなかで収集してきた国内外の観光研究書や実務書、調査報告書、統計資料などで、図書館とは別の分類方法で管理してきた非公開資料です。図書館との重複本をチェックしながら、再分類、図書ラベルの貼り替えなどを実施し、可能な限り公開することとしました。

9 家具の調達に 奔走する

2016年4月～6月

現図書館のフロアは、木製家具を中心とした落ち着いた雰囲気の間となつています。特に図書館への入口となる1Fは、「カフェ風」イメージでデザインしています。これらの家具のデザインや選定にも図書館として主体的に関わりました。たとえば1Fの受付カウンターは、来館者とスタッフとの関係性にも配慮しその高さや幅も慎重に検討しました。書架や雑誌架、メインテーブルも、細かなデザインにまでこだわって特注した

ものです。また、1F、B1Fの閲覧テーブルやイス、ソファなどは、職員自ら幾度もショールームに足を運び選定したもので、それだけにこだわりと愛着があります。

もちろん図書館の家具は、新しいものばかりではありません。1Fのエントランコーナりの雑誌架、ガーデンラウンジ奥の低書架、木製イス（3脚）、そしてB1Fのカウンターは、図書館を継承する意を込めた旧館時代の思い出の家具たちです。

10 南青山への移転、 リニューアル開館 する

2016年8月～10月

2016年8月10日～14日、
本部の総務・研究部門に先立ち



リニューアル開館前の図書館（開館準備中）



引越風景（移転時のダンボールの山）

港区南青山へ引越。久喜倉庫にある旧館の資料と本部資料室資料の2箇所からの引越作業となりました。この移転時の資料はダンボール約2300箱分（図書館1500箱、資料室800箱）で、開梱・書架入れは数日かけての作業となりました。用意周到に準備してきたとはいえ、2箇所資料をはじめて同じ書架に収めることになるため、想定通りに収まらないこともあり苦労しました。その後開館までは図書館システムの目録データの修正や運営資料の準備などに追われました。

9月には、財団・JTB関係者や賛助会員、図書館関係者などを対象に、「特別版たびとしよCafe」をセットにした3回の内覧会を開催し、10月3日

11 知的遺産を 受け継ぎ、 新たな役割を担う 専門図書館へ

図書館は社会の情報基盤として重要な役割を担っており、過去の先人の知にふれることのできる貴重資料は、将来にわたって受け継ぐべき知的遺産でもあります。

旅の図書館は、観光文化資料館として開設以来、時代社会の要請に応えながら図書館機能およびコレクションの充実に取り組みでまいりました。こうした過去の蓄積の上に、現在の図書館があります。

これからも、「観光文化の向上（振興）」という開設時の理念と旅行・観光に関する知的遺産を受け継ぎつつ、ますます情報が社会の基盤になる「情報社会」のなかで、「観光の研究・情報のプラットフォーム」としての役割を果たしうる専門図書館を目指して運営努力してまいります。